

褥瘡予防を“入所前”から —標準化されたマットレス選定支援ツールの導入効果—

大崎町 介護老人保健施設サンセリテのがた

発表者： 内野 祐輔 （理学療法士）

共同演者：春別府 稔仁（医師）

【背景】

高齢者において褥瘡は生活の質を大きく損なう重要な問題である。当施設でも褥瘡予防のため複数種類のマットレスを導入しているが、その選定方法は各職種が経験や印象をもとに協議する形であり、判断基準のばらつきや時間的負担が課題となっていた。現場では「どの利用者にどのマットレスが合っているのか分からない」「選定判断に迷いがある」「選定に時間がかかる」といった声が多く、主に入所後に対応するケースが多く、創トラブルや体重減少などの発生後に対応するケースも少なくなかった。このような状況は、褥瘡予防の質と業務効率の両面に悪影響を及ぼしている。

【課題】

- ① 利用者ごとの適切なマットレスが分かりにくく、選定が属人的になっていた。
- ② 入所前入所者の状態は情報が限定的であり、OH スケールなどガイドラインに沿った評価は一部しかできない。
- ③ スタッフ間で判断基準が異なり、統一した視点が欠如していた。
- ④ 状態変化時の情報反映が遅れ、創トラブルの発生後や栄養状態の悪化後の対応になりがちであった。
- ⑤ 介護職がマットレスを準備する際、リハ専門職や看護師と協議する必要があるが、協議する手間が現場負担となっていた。

【目的】

本研究の目的は、入所時の利用者ごとのマットレス選定基準を「見える化」し標準化することで、スタッフの判断を支援し、入所直後のリスク対応を迅速化することである。

【方法】

現場職員が主体となり、独自の Excel ベース選定ツールを作成した。評価項目は褥瘡ガイドライン（第3版）を参考にして、入所前情報から抽出可能な内容に限定した。

- ①ADL（寝返りの可否）、②褥瘡既往（現在進行形を含む）、③食事量・体重変化（BMI にて評価）、④皮膚疾患の有無（浮腫や創傷の有無）、⑤拘縮の有無の5項目である。これらを点数化し、総合得点に応じて適切なマットレスが提案される。運用は、相談員が準備するカンファレンスシートに基づき、介護職が中心となり、必要に応じて看護師・リハ職が共同で確認して、入所前のベッド作成に活用する。定期的なモニタリング時と状態変化時に再評価し、現在のマットレスが適正であるかの判断材料とする。選定結果はケアプランに記載し、関係職種間で情報共有する体制を整備した。

【結果】

2025年4月から一般棟の新規入所者20名を対象に試験運用を実施した。導入前は利用者ごとのマットレス選定に検討時間を含め平均10分を要していたが、ツール導入後は平均1分に短縮された。入所前から状態に応じたマットレスを早期に選定できる体制が整ったことにより、褥瘡発生率の悪化は認められず、創トラブルへの先手対応が可能となった。また、このツールの活用により、介護職主体で選定作業を進めて、看護師・リハ職の確認が補助的役割となった。

【考察】

本ツールの導入により、マットレス選定の「見える化」と「標準化」が進み、従来は属人的であった選定の判断が短時間で共有できるようになる可能性がある。現時点で褥瘡発症率の悪化は認められず、導入後の期間が短いものの予防基盤の整備という観点からは一定の効果が示唆される。特に、選定時間の短縮や多職種連携の効率化は現場職員の心理的・時間的負担の軽減に寄与しており、今後の褥瘡予防ケアの質向上につながる可能性がある。

【結論・展望】

独自に作成した Excel ベース選定ツールは、現場負担を軽減し、判断の質と効率の向上を両立できる可能性を示した。今後は全入所者への展開を視野に、継続的に運用・改良を進めていくことで、より良いケア環境の構築に貢献できると考える。